図書館だより

第３号　平成11年１月発行
弓削商船高等専門学校図書館

平成10年度導入されたタッチ式図書検索装置

目　次

私の古典 …… 学校長 黒澤　昭　2
特集　私が勧めたいこの１冊、私が感銘を受けたこの一冊
教官 亀山教官、濱井教官、神谷教官、秋山教官、久保教官、山尾教官　3
学生 松浦宏明、アブドゥル・シュクール、近藤加奈子、
渡邊　優、村上尚子、岡野美保、峯松久美子、
阿部美知子、松原圭一、児玉賢志、竹内恒治
平成10年度読書感想文入賞作リスト …… 5
図書館統計 …… 5
インフォメーション …… 6
編集後記 …… 6

私の古典

学校長　黒　澤　　昭

私の専門は原子力工学ならびに舶用原子力機関である。この原子力工学は理学、工学、医学等にまたがるいわゆる複合領域といわれる学問領域で、原子核物理、原子炉物理、原子炉熱流動、原子炉の動特性と制御、原子炉計装、原子炉の燃料と材料、原子炉遮蔽、放射線測定と放射線管理などであり原子力技術者の必要とされる知識は最低これらの領域をカバーするよう要求される。しかし研究となるとそれぞれの学問領域の背景が異なるため全部を対象にすることはできずどれかの領域ということになる。それらの中で私の研究対象は原子炉の熱流動である。原子炉の熱流動の解析は従来の熱機器とは比較にならない程重視され、高い信頼性が要求される。その理由は原子炉がエネルギープラントとして多数実用に供されるようになり、その事故や故障がときには人間生活に重大な危険をもたらす可能性を含んでいることにある。同じ要求は宇宙開発機器や航空機の伝熱計算、流れの計算においてもみられる。

ところで私はこの原子力工学の修得のため1963年（昭和38年）９月から1964年（昭和39年）８月まで１年間科学技術庁原子力留学生としてアメリカ合衆国のシカゴから南西に25マイル離れたアルゴンヌ国立研究所（Argonne National Laboratory）内にある国際原子炉学校（International Institute of Nuclear Science & Engineering）に留学した。1953年に時のアメリカ大統領アイゼンハワーの提唱する“原子力の平和利用（Atoms for Peace）”の推進のためにアメリカが世界各国から科学者、技術者を受け入れ原子力工学者の育成を図ったもので1955年から1965年まで開校され日本からは産・官・学併せて101名が留学し、同コースを修了している。

最初の６ヵ月間は原子力工学の講義ならびに実験・実習、あとの６ヵ月間は希望する研究テーマに従い配属され、私は熱流動研究室を希望し沸騰水型原子炉の安定性に関する熱流動現象の解析を行った。研究所の顧問としてNorthwestern大学（Illinois州　Evanstonにあるアメリカ中西部の市立名門校）S. G. Bankoff教授が１週間に１度来られ親しくご指導頂いた。同教授はアメリカでもこの分野では傑出した研究者であり、現象をよく観察し、物理的にモデル化して明快な結果を出される方である。教授から薦められた何冊かの本がありそれらはM. Jakob：“Heat Transfer（Ⅰ,Ⅱ）”(1949,1957)，R. B. Bird, et al.：“Transport Phenomena”1960，H. Schlichting：“Boundary Layer Theory”1962などでいずれも古典的名著とされる。

これらの書籍をシカゴ市内の中心部にあるKroch's & Brentano'sという書店で求めた。その中の“Heat Transfer”はvol.Ⅰ，vol.Ⅱともに15＄で当時の国家公務員の留学生の生活費は１日当たり10＄であることから私には決して廉くはなかった。この本の著者であるMax Jakob（1879～1955）はドイツの物理学者で高圧蒸気、空気の物性、熱伝導率の測定方法ならびに沸騰や凝縮現象の研究、パイプやノズル内流れの研究など熱工学に関する幅広い研究を行い、熱伝達“Heat Transfer”を著わし伝熱工学として体系化したのである。したがって最近のこの分野の本のようにスマートに書かれていないが、その行間から溢れるのは先駆者として初めて体系化した著者の並みゝならぬ力量と気迫であり、あらためて新分野を拓いた先人の学問に対する情熱、偉大さにただ粛然たる思いをするばかりである。

この本の裏表紙に書店のレシートが貼ってあり、その購入日を見ると1963年10月１日とある。購入後35年を経過して背表紙の書名の金文字もすっかり輝きを失って薄くなり、装丁も色褪せているが、私の目には今なお燦然とした輝きを発しているように思える。時折書架から取り出してそのどこかの章を読む度に著者の学問に対する情熱に深い敬意を抱くとともに、当時指導して頂いたS. G. Bankoff先生の温顔とシカゴで暮らした１年間の古き良きアメリカが思い出される。

特集

▶私が勧めるこの１冊
▶私が感銘を受けたこの１冊

本校教官にアンケートの御願いをしました。

(1) 私が勧める（学生に読んでもらいたい）本
(2) 感銘を受けた本
(3) (1) または (2) を読んだ年齢
(4) 上記の本を勧める理由、または感銘を受けた点

◆亀山　和麿 教官

「宮本武蔵」（吉川英治）
「アンナ・カレーニナ」（トルストイ）
30歳　　16歳，28歳

『…惜しいと、わしがいうのはその事だ。おぬしには生まれながらの腕力と剛気はあるが、学問がない、武道の悪いところだけを学んで、知徳を磨こうとしなかった。文武二道というか、二道とは、ふた道と読むのではないふたつを揃えて、一つの道だよ。わかるかい武蔵』

◆濱井　禧价 教官

「英霊の声」（三島由紀夫）

20歳(?)

戦死した特攻隊員が英霊となり天皇に対して“などて皇（すめらぎ）は人となり給（たま）ひしか”と訴える。心の支えとは何かについて随分考えさせられた。

◆神谷　正彦 教官

「家族八景」（筒井康隆）
同上
昭和59年ごろ（年齢はご勘弁を）

人間は複雑な内面をもつ存在です。これからの時代はとりわけ自己のアイデンティティを確立し、自己抑制（セルフ・コントロール）ができることが不可欠ではないでしょうか。人間探究の書として、これをイチ押しで推薦します。

◆秋山　秀樹 教官

「奪われし未来」（シーア・コルボーン，ダイアン・ダマノスキ，ジョン・ピーターソン・マイヤーズ）
「竜馬がゆく」（司馬遼太郎）
19歳

あまりにも有名な書籍です。片田舎に生まれ育った坂本竜馬が、時代の先を一早く読み取り、意気盛んに日本中をかけめぐる姿が印象的です。学生諸君、大志をいだき、大きくはばたいてください。

◆久保　康幸 教官

「不思議な少年」「人間とは何か」（マーク・トウェイン著　中野好夫訳　岩波文庫）
20歳頃

大学２年の終わりにサークルをやめて大学へ入学した本来の意義を考えていたころ（あるいは自己を模索していたころ）これらの２冊に出会い、「不思議な少年」のまさにその不思議さに惹かれ、「人間とは何か」では老人の言おうとしている「人間は善行によって本人が気持ちよくなるために善行をする」ということに、共感した。高校時代倫社でカントを習ったとき「よい志の結果的によくない行為」と「自己本位の志の結果的によい行為」のどちらが道徳的か考えたことを思い出しながら。

◆山尾　徳雄教官

「きけわだつみのこえ」（日本戦歿学生手記編集委員会）

30歳頃

内戦の続くアフリカのスーダンの孤児収容施設（施設とは名ばかり）で「将来の希望は？」と聞かれた１人の女の子が、「生き残ること」と答えたのを聞いた時には、日本との落差の大きさにがく然とした。しかし、日本でもかつて希望に燃えて勉学をしていた多くの学生が戦争にかりだされて命を落とした例がある。それらの人が死を目前に控えて書き残した手記を集めたのがこの本である。自分というものを自分を離れて外から見る契機にしてほしい。

学生諸君にアンケートの御願いをしました。

(1) 感銘を受けた本
(2) (1) を読んだ年齢
(3) 上記の本を勧める理由、または感銘を受けた点

◆松浦　宏明

「エリック（上、下)」
「バッド・キッズ」（村山ゆか）
18歳

(1)みにくい顔と天性の才能を持った、少年の悲劇を描いた作品。　表現が、とてもきれいである。少年の人にはいえない恋をよりリアルに描いている。

◆アブドゥル・シュクール

「BRAVE HEART」
20歳

William Wallaceという人は愛する国（Scotland）のため愛する女性のため、自由のために戦う。平和を愛するWilliamが恋人をイギリス軍に殺された事で怒りを爆発させた。誰にも止められない。彼はスコットランドの人々の力になり、国のため戦い、ヒーローとして死んでいった。

◆近藤加奈子

「犠牲　わが息子・脳死の11日」（柳田邦男）
17歳

死について考えさせられました。正直、この本を読み終えて私の人生が終わったら…と真剣に死の恐怖に悩む程でした。人間の生と死にを身近に感じられる１冊だと思います。

◆渡邊　優

「兵士に聞け」（杉山隆男）
15歳

この本は、日本の自衛隊の隊員達の心の内がわかる本です。一部ではうとまれ、又ある時は政治に振りまわされる自衛隊。日本人として、日本の矛盾ともいわれている自衛隊について、よく考えてみるきっかけになる本だと思います。

◆村上　尚子

「ふたりの証拠」（アゴタ・クリストフ）
16歳

この本は、「悪童日記」「ふたりの証拠」「第三の嘘」という三部作のうちの二作目です。文章に感情がなくて冷たい感じのする本ですが、すごくおもしろいです。最後の「第三の嘘」は今いち意味が分からなかったけど、それでもこの三部作、特に「ふたりの証拠」は私が今まで読んだ本の中で一番心に残っています。

◆岡野　美保

「風紋」（乃南アサ）
18歳

この本は、ある殺人事件の犯人の家族と被害者の家族の視点で描かれています。私の、「事件が起こって苦しむのは、本人達はもちろんだが、その家族達もなのではないか？　そういった奥深いところまで描かれた本を読みたい」という思いにこたえてくれた１冊です。

◆峯松久美子

「いちずに一本道　いちずに一つ事」（相田みつを）
19歳

著者の相田みつをは、詩と書を多く描いた。これは、それらを集めた自伝エッセイ。受け止め方は、その人その人で違うだろうけど、私はこの本をとても好きです。

◆阿部美知子

「赤毛のアン」（モンゴメリー.L.M）
11歳

この本は私に色を与えてくれた。ページをめくれば、どんな宝石や写真集にもない色鮮やかな世界がそこに拡がっていた。その世界とは夢を描いたものでもなければ、初めて耳にする別世界でもない。巡る季節の中で私たちが普段目にする日常の風景が美しい描写でつづられているだけなのである。アンは言っている。「楽しい幸せな日々というのは、何か目を見張るようなことや、素晴らしいことや、わくわくすることがあった日というわけではないのね。なんでもない小さな喜びを感じられる日が一日、また一日続くことなんだわ。ちょうど真珠が１つぶ１つぶ糸からすべり落ちていくように。」私は、いくつもの奇跡が起こるこの世界に、今も憧れている。

◆松原　圭一

「空想科学読本１,２」（柳田理科雄）

18歳

非常におもしろい内容だと思う。夢は少しこわれるかもしれないが。現代科学と空想科学の差がおもしろい。

◆児玉　賢志

「空想科学読本１,２」（柳田理科雄）

18歳

むちゃくちゃなへりくつをならべているところがおもしろい。

◆竹内　恒治

「アルジャーノンに花束を」（ダニエル・キイス）

15歳

人に対する物の見方、考え方が今までの自分とは違う所にあり、新鮮な感動を覚えました。人間の「素直」さに心から感動できる一冊です。

平成10年度　読書感想文 入賞作リスト

Ｓ１

木床　　聡　「夢をつなぐ」
松本　大輔　「ぼくは勉強ができない」
村上　伸一　「燃えよ剣」

Ｍ１

児玉　　強　「ぼくらの７日間戦争」
曽我　聡寛　「アンネの日記」
根之木悠貴　「老いの泉」
山田　朋子　「夜」

Ｉ１

大出　幸子「風吹かば」
澤田　真子「二十四の瞳」
中村　誠希「イチロー物語」
山岡　梨沙「風の旅」
山田　修平「銀河鉄道の夜」

Ｓ２

金子　大輔　「老人と海」
黒飛　岳大　「織田信長」
谷本　　光
「たたかいの人ー田中正造ー」

Ｍ２

竹内　恒治　「タナトノート」
原田　照雄　「フォレスト　ガンプ」
松本　智晴
「アルジャーノンに花束を」

Ｉ２

安藤　美紀「ホロコースト前夜の脱出
ー杉原千畝のビザー」
片山　深幸「赤毛のアン」
徳井　　渉「人間失格」

図 書 館 統 計

分類別蔵書冊数　　（H10.3.31現在）

和洋別	総 記	哲 学	歴 史	社会科学	自然科学	工 学	産 業	芸 術	語 学	文 学	合 計
和 書	4,444	1,710	4,779	4,585	8,214	18,458	974	3,608	3,345	11,622	61,739
洋 書	49	21	67	249	389	519	10	6	224	283	1,817
計	4,493	1,731	4,846	4,834	8,603	18,977	984	3,614	3,569	11,905	63,556

図書館利用状況（平成９年度）

入 館 者 数

項　目	合　計
学　生（人）	13,257 （ 2,438）
教 職 員（人）	897 （ 236）
学 外 者（人）	415 （ 123）
計　（人）	14,569 （ 2,797）
開館日数（日）	246 （ 219）
１日平均（人）	59.2 （ 12.8）

館外個人貸出者数

項　目	合　計
学　生（人）	1,489 （ 293）
教 職 員（人）	303 （ 15）
学 外 者（人）	37 （ 45）
合　計（人）	1,829 （ 353）

館外個人貸出冊数

項　目	合　計
学　生（冊）	2,020 （ 402）
教 職 員（冊）	706 （ 33）
学 外 者（冊）	80 （ 109）
合　計（冊）	2,806 （ 544）

＊（　）は、時間外利用

図書貸出状況（分類別）（平成９年度）

単位：冊

分類別	000 総記	100 哲学	200 歴史	300 社会科学	400 自然科学	500 工学	600 産業	700 芸術	800 語学	900 文学	その他	合計	貸出日数	１日平均貸出冊数
合計	121 （ 13）	30 （ 10）	61 （ 9）	161 （ 20）	183 （ 35）	1,136 （ 214）	14 （ 3）	53 （ 11）	42 （ 9）	990 （ 209）	15 （ 11）	2,806 （ 544）	246 （ 219）	11.4 （ 2.5）
%	4.3 （ 2.4）	1.1 （ 1.8）	2.2 （ 1.7）	5.7 （ 3.7）	6.5 （ 6.4）	40.5 （ 39.3）	0.5 （ 0.6）	1.9 （ 2.0）	1.5 （ 1.7）	35.5 （ 38.4）	0.5 （ 2.0）	100 （ 100）		

＊（　）は、時間外利用

インフォメーション

ヤフージャパンのページに図書館の項目があります。オンライン図書館を選択し、さらに、書籍デジタル委員会という項目を選択します。そして、リンク図書館を選ぶと著作権がきれた作品が入力してあり、選択することによりそれらの作家の作品が読めるようになっています。芥川龍之介、夏目漱石、森鴎外等の作品があります。

（http://www. yahoo. co. jp/）

編集後記

10月下旬、毎日新聞が発表した読書に関するアンケート調査結果によると、長く続いてきた活字離れの傾向に歯止めがかかったようです。ところで本校は依然としていわゆる「長期低落傾向」が続いています。学校図書館以外での読書を期待するのみです。

アンケート調査中で「本を読まない理由」として選択された項目の１つに「読まなくても困ることはない」というものがありました。日常生活上たちまち支障をきたすという事はないにしても、将来、就職試験を受けたり、将来計画を立てたりする時に情報無しではどうにもなりません。パソコンの画面で読むことも含めた読書が不可欠です。

例えば、外国に行って、自分の目、足で確かめ、見聞を広げるというのは大切で素晴らしいことです。新鮮で、体全体で得た、細かなニュアンスも入った、書物では得ることのできない知識を与えてくれます。ただ、５年、10年と経つうちにそれは、時として随分色褪せてしまう可能性があります。しかし、情報の補充をしておけば、情報が生きた情報として長く役立ちます。追加する情報の多くは、読書で入れることになるかと思います。その様に、広い意味での読書は、大変重要です。日々の生活に流されてしまうこと無く、自分の能力を高め、潜在能力を十分に発揮する事に意を注いでほしいと思います。